

第 57 回戦争体験文庫企画展示

愛国と国防の相克

～国防婦人会奈良本部と『大和婦人』



品問慰のりよ會分内管たれらけ届に部本

期間：2021年7月1日～10月28日

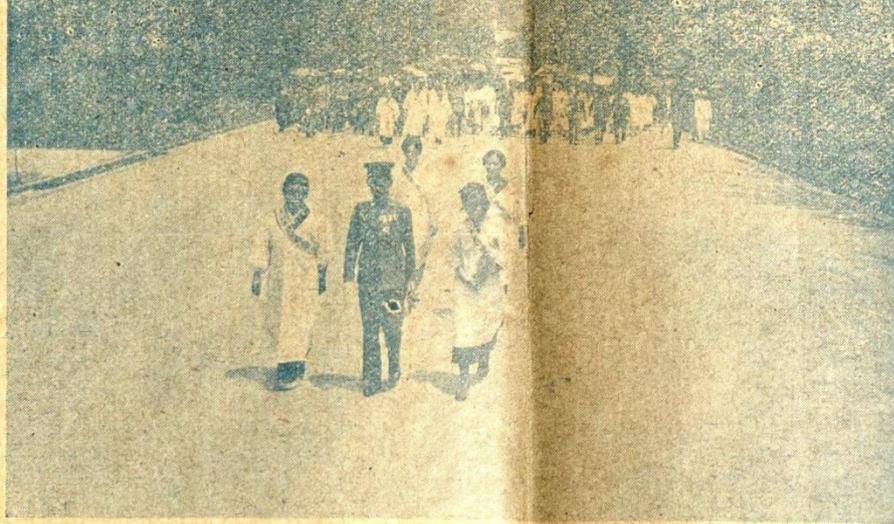
場所：奈良県立図書情報館3階

「大和婦人」発行一覧

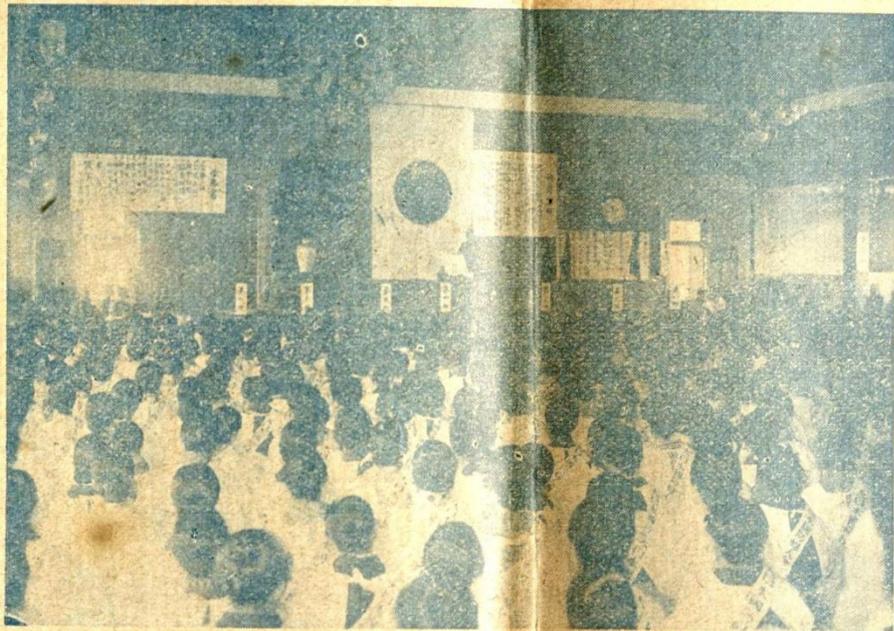
号数	発行日	号数	発行日	号数	発行日	号数	発行日
昭和9年(1934)		20号	6.10	43号	5.10	66号	4.10
創刊[1]号	11.1	21号	7.10	44号	6.10	67号	5.10
2号	12.2	22号	8.10	45号	7.10	68号	6.10
昭和10年(1935)		23号	9.10	46号	8.10	69号	7.10
3号	1.1	[24]号	10.10	47号	9.10	70号	8.10
4号	2.1	25号	11.10	48号	10.10	71号	9.10
5号	3.1	26号	12.10	49号	11.10	72号	10.10
6号	4.1	昭和12年(1937)		50号	12.10	73号	11.10
※判型変更		27号	1.10	昭和14年(1939)		74号	12.10
7号	5.1	28号	2.10	51号	1.10	昭和16年(1941)	
8号	6.1	29号	3.10	52号	2.10	75号	1.10
9号	7.1	30号	4.10	53号	3.10	76号	2.10
10号	8.1	31号	5.10	54号	4.10	77号	3.10
11号	9.1	32号	6.10	55号	5.10	78号	4.10
号外	9.7	33号	7.10	56号	6.10	79号	5.10
国婦寮落成号		34号	8.10	57号	7.10	80号	6.10
12号	10.10	35号	9.10	58号	8.10	81号	7.10
13号	11.10	36号	10.10	59号	9.10	82号	8.10
14号	12.10	37号	11.10	60号	10.10	83号	9.10
昭和11年(1936)		38号	12.10	61号	11.10	84号	10.10
15号	1.10	昭和13年(1938)		62号	12.10	85号	11.10
16号	2.10	39号	1.10	昭和15年(1940)		86号	12.10
17号	3.10	40号	2.10	63号	1.10	昭和17年(1942)	
18号	4.10	41号	3.10	64号	2.10	87号	1.10
19号	5.10	42号	4.10	65号	3.10	88号	2.10

当館では、2人の寄贈者よりまとまった形で「大和婦人」をいただいております、通覧が可能です。原紙の請求、閲覧も可能ですが、劣化の著しい原紙保護の観点から、なるべく開架にある複製版をご活用いただきたい。

写真等出典 表紙『大日本国防婦人会記念写真帖』1942(「奈良地方本部」)、以下『大和婦人』分を単に号数で示す。1頁1号 2頁6号(田路)5号(観閲)7号(植村) 3頁59号 4頁 ともに号外 5頁13号、5号 6頁5号、13号 7頁48号(上、田原本町)、19号 8頁33号、75号 9頁79号 10頁7号、88号 11頁44号



ツ向方前員會ルス拜參ニ宮神爲ノ呈奉文願祈後了終式日當
佐大路田官令司區隊聯良奈、人夫臣大軍陸前木荒リヨ左テ



況盛ノ式會發部本良奈テ於ニ館會國建傍敵日四十月七

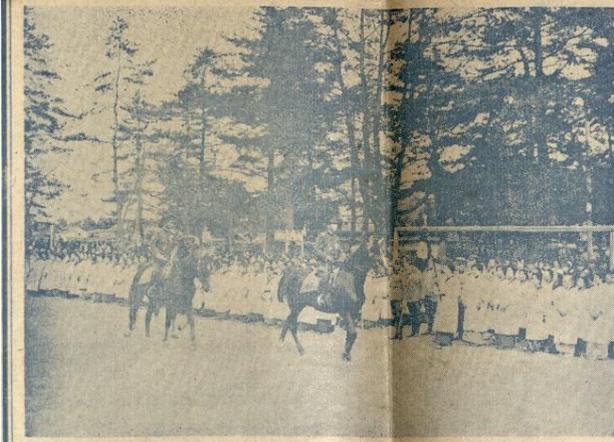
1. 国婦奈良本部の発足

昭和9年(1934)7月14日、大日本国防婦人会(以下国婦と略)奈良本部は、敵傍の建国会館で発会式を行います。11月には、月刊機関紙『大和婦人』を創刊するとともに、県内各町村単位に次々と分会を組織しています。「設立一周年記念号」を銘打った第9号で、奈良本部副本部長植村サカノは、発会式の閉会の挨拶で、1年で会員10万人を目指すとしたところ、「とても無理だ、せめて2万といえいいの」と言われた、しかし、10万には届かなかったものの、6万人の会員を得て県下全市町村に分会を組織しえた」と回顧しています

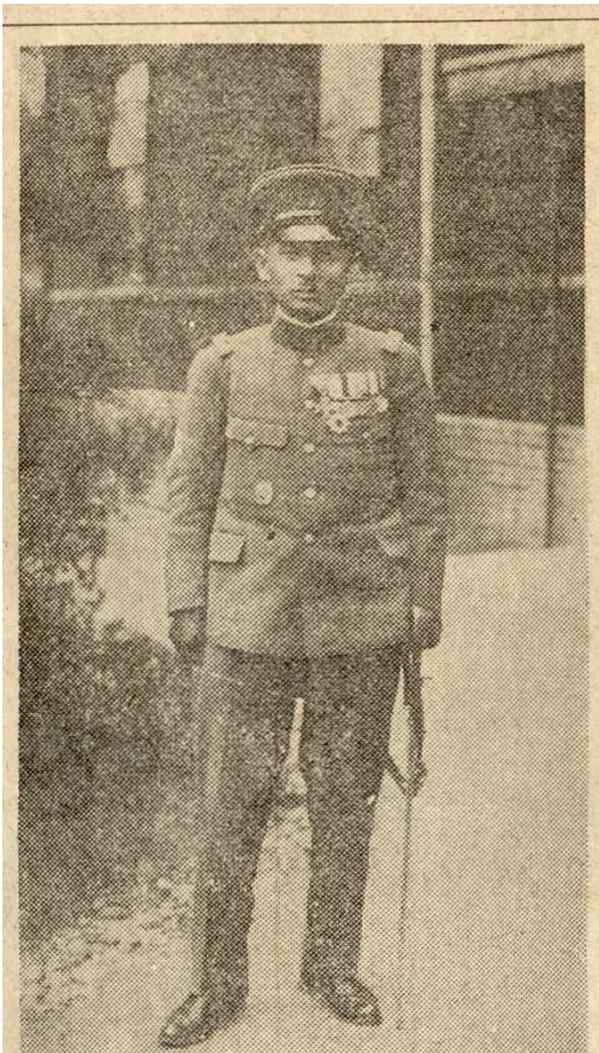
(「設立一周年を迎えて」第9号)。組織の急拡大に成功した自負がうかがえます。

国婦奈良本部(後地方本部と改称)とは、どのような組織だったのでしょうか。『大和婦人』第2号では、本部役員構成を次のように記しています(「奈良連隊区司令官口演要旨」第1号)。

本部長 1 司令官(又は連隊長)夫人
 副本部長 3 司令部高級部員(事故の際は次席部員)夫人・地方側2(本部指命)
 理事若干名 男子之部 司令部高級部員(総務理事)・同副官・同嘱託 女子之部 司令部副官婦人・地方側若干名(本部指命)



東久邇宮殿下ヲ迎へ御觀開の實況(昭和十年三月二日)



で親のみ産會人婦防國良奈
官令司區隊聯前 すまゐ
殿 佐 大 路 田



光榮を擔へる箸尾町分會長
本部副本部長植村サカノ姉

監事 男子之部 司令部次級部員 女子之部 司令部次級部員夫人・地方側 3 (本部指命)
評議員 17 市郡割

その後、分会の整備が進み評議員体制の確立していくなかで、「本部指命」は「評議員会で選出」に代わっていきますが(「七月中本部記事」22号)、大枠自体は昭和17年の解散まで変化がありません。「司令部」を中心とする体制だったことがわかります。

ここでいう「司令部」とは、町村と連携して徴兵事務等を行う陸軍の連(聯)隊区司令部のことで、具体的には奈良連隊区司令部を指します。役員に

は、原則的に女性も就任することになっていました。本部長に、わざわざ「又は連隊長夫人」という文言が入っているのは、陸軍の人事異動で赴任した連隊区司令官が離死別や未婚等の理由により、単身者であることをも想定してのものでしょうか、奈良本部の場合、結果として連隊区司令官の妻が本部長に就任し続けました。本部長ともなると、折目折目で『大和婦人』紙上に文章を寄せているのが確認できますが、司令部員の夫人枠で選出される副本部長や理事の影は薄いものでした。例えば、昭和11年3月には、分会の指導にのべ9回役員が出張していますが、女性役員が赴いたのは、1



昭和十四年九月九日印刷
 郵税共 拾貳錢
 發行所 大日本國防婦人會
 本部 奈良市西中町十五番地
 義則 奈良市西中町十五番地

田路閣下陣歿を悼みて

大日本國防婦人會奈良本部

人生限りあり誰か其の極を知るべきましてや、身を砲火の下に曝し一死君國に奉ずる



在りし日の田路閣下

員一同この喜びを傳へ聞くや
 「我等の將軍田路閣下」の武
 運長久を只管祈れり、然るに
 興亞の姿を見ずして勇壯無比
 の陣歿を遂げらる。驚愕其の
 極に達し追慕の情切々たり。
 思へば世の誹謗と迫害を顧
 みず幾多の苦難に耐へ一意本
 會の創立に盡瘁せらる。其の
 功績何にか譽ふべき、今や本
 會も目覺しき躍進を遂げ負ふ
 べき任務亦重大を加ふ、一
 同益々結束を堅くし本會使命
 の達成に邁進すべきなり、か
 くてこそ育への親田路將軍の
 英靈に應ふる所ありし信す。
 茲に謹みて生前の御指導を深
 謝し御冥福を祈る。

「噫」田路少將

田原本町 宮崎

大阪毎日新聞 昭和十四年七月十八日

田路少將戦死す

黄梅西北で 搭乗機自爆

「中支軍發表(十七日午後五時)昭和十四年六月十七日作戦要務を以て漢口發南京經由上海に向ひたる海軍陸上攻撃機は悪天候を冒して低空飛行中午前十時三十分黄梅西北方約十五キロ老祖山上空において地上の敵と交戦機體に敵弾をうけ敵地に突入乗員田路少將以下十二名壯烈なる戦死を遂けたり右遺骨全部七月九日我方に收容せり」……

婦徳を基とし益々之を顯揚し惡風と不良思想に染まず國防の堅き礎となり強き銃後の力となりませう

回植村副本部長の例があるだけで、他は「男子之部」の司令部員が行っています(「三月中奈良本部事業」第18号)。この司令部員夫人枠ではなく、地方側選出副本部長である植村は、創刊当初の『大和婦人』に毎号のように寄稿するなど、目立った存在でした。特に東久邇宮第四師団長が秋季演習統監で昭和10年奈良を訪れた際には、「曩(さき)に関西本部にて良く勤めて功勞あり今又奈良本部創業当時より非常に尽力」したことが評価され、特に単独拜謁が許されています(「植村副本部長無上の光榮」14号)。

また、連隊区司令官は、形式的には前述した「役

員」には入っていないものの、実質的には部下である司令部員を指揮し、本部を主宰したといえるでしょう。特に陸大出のエリートで、奈良本部発足当時連隊区司令官であった田路(とうじ)朝一は、後に歩兵第38連隊長に転じ、満洲に出征してからもたびたび『大和婦人』に寄稿を行うなど、奈良本部と深い関係を保ち続けました。その田路が昭和14年日中戦争で戦死した際には、『大和婦人』は大きな扱いをしています(59号)。

国婦の活動は、以下に掲載する写真にもわかるように、軍にまつわる行事への出席、慰問袋作成、兵士歓送迎一般的な社会奉仕活動等です。町村域



國婦寮全景



國婦寮内部



前本部長現顧問田路の夫人
陸軍大臣代河村中将閣下へ
献納の光景

を基本とする分会ごとの活動が中心になりますが、設立間もない奈良本部が、全県的に力を入れた事業として、「国婦寮」のための寄付金募集があります。県下分会が集めた合計 11,254 円余の寄付金は、陸軍省に寄付され、奈良衛戍病院内娯楽室国婦寮の建設や備品費に充てられ（「国婦寮寄付金使途概算書」号外）、昭和 10 年 9 月 27 日には献納式が行われました（11 号）。

2. 他婦人団体との関係をめぐって

藤井忠俊『国防婦人会』岩波新書、1985 等が明らかにしているように、国婦は、昭和 7 年頃から

大阪の安田せいらが、軍要人を巻き込みつつも、軍国熱を背景に一般主婦層を動員することに成功し、一種の社会運動的に発展していった団体です。その中で、割烹着～当時の呼び方では白エプロン～と襷姿はトレードマークとなり、『大和婦人』紙面に掲載される写真も、割烹着であふれています。

軍主導の組織が、従来軍とは関係の薄かった主婦層を組織していったことには、強い反発がありました。藤井も指摘しているように、昭和 8 年には大阪で、信号無視をとがめた巡査に休暇外出中の兵士が従わなかった、という些細な出来事が、警察－内務省と師団－陸軍省の壮大な面子・権限



高田町分會慰問袋調製



争いに発展したゴーストストップ事件も起こっています。従来から国や府県レベルでは内務省系列の愛国婦人会の活動があり、国婦の勃興にも刺激を受ける形で、会員や事業の拡大を図り、奈良県内でも昭和11年末では約1万8千、14年末では約3万6千の会員を擁しています(『愛国婦人会四十年史』1941)。また、町村単位でも民俗的な若者組等を再編する形で整備が進んでいた青年会や女子青年会があり、その延長線上に戸主会や婦人会が組織されるケースもありました。文部省は、こうした婦人会の組織化を図るべく、昭和5年に、大日本連合婦人会を発足させました。同会は婦人会活

動のマニュアルともいべき『系統婦人会の指導と経営』1935を編集、発行しますが、その「前がき」には、「特殊目的団体はその本来の使命を忘却して系統婦人会に擬し、その会員獲得会勢拡張に狂奔してゐる」と、名指しこそ避けているものの、あきらかに国婦を意識してこれを強く批判しています。

『大和婦人』では、こうした批判を意識して、国婦の独自性を強調し「屋上屋を架」すものでないことを強調しています。本部設立間もない、昭和9年の田路連隊区司令官は、愛国婦人会と国婦は「工兵と歩兵のようなもので、大同小異ではなく小同



葛村分會步兵第三聯隊附軍演習の際に於ける湯茶接待の情景
昭和十年二月七日 (照參文本)



當麻村慰問品手藝講習會の實況

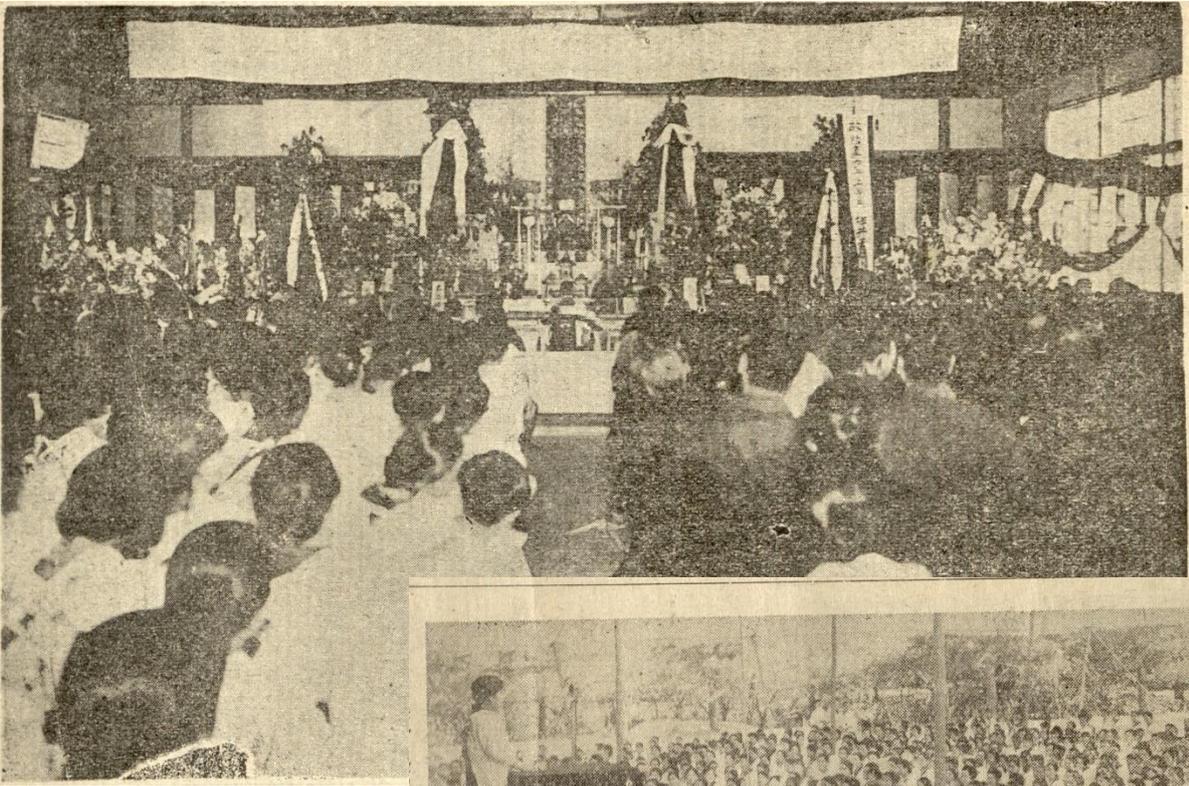
大異」としています。『大和婦人』は第3・4号で、増沢中佐による「会員必読国防婦人会問答」を掲載し、「両者の事業に区別がない」といった国婦不要論に対する反論をしています。

では、村々で、分会はどのように整備されていたのでしょうか。細かくは今後町村レベルの史料の発見を待つ他ない部分があり、44号(本図録11頁)に掲載されている分会役員一覧から、どんな人物が役員に就任しているかを調べていく必要があります。が、『大和婦人』紙上には、国婦分会の発足に至るいくつかのケースが紹介されています。北葛城郡下田村(現香芝市)分会長西村和子

は、同分会が戸数9割弱の380人を組織し、好成績を上げている理由として、村では在郷軍人会分会の活動が活発であったことと、前身である15年前結成の下田地方婦人会の活動があったことをあげています(「国防を結成するにあたりての感想」第2号)。そこに、「目下の非常時局」に際会し、誰いうともなく自発的に国婦結成の機運が高まり、分会の組織に至ったとしています。

また阪合部村(現五條市)では、大正10年修養機関としての村の婦人会が、「我婦人会員は蹶然として我国現下の状況に鑑み・・・国家非常時に於ける婦人の覚悟を促すべく」昭和8年10月に村の国

寫眞は故細井元治郎氏町葬會場



摺換の長部支藤齋る於に會總市良奈

婦を結成したとします。戸数500の村内に会員270を擁し、大字ごとの支部には「村婦人会と合体二名づきの役員」が置かれたとしています（「阪合部分会状況」6号）。

田原本町では、教育勅語40周年の昭和5年を機に婦人会が発足、会員も逐次増加していったところに、昭和10年2月各地に国婦が結成されるに及び、従来の婦人会を国婦に改称し、会長を小学校長から人格者である吉井ハルへ交代したとしています（宮崎「田原本分会のできるまで」53号）。

こうした事例は、従来の婦人会が発展、それと重なる形で国婦分会となった事例と言えます。こ

うしたケースは、全国的にも多かったようで、前述の『国防婦人会』で藤井は、「国婦ができてから愛国婦人会はなくなりました」と聞き取りに答えていた人物の記録を調べたら、実はその後愛国婦人会役員勤続功労者として表彰されていたといったケースをもあげています。（97頁）

一方、村内で各種の婦人団体が併存していた事例も見出すことも出来ます。十津川村中野村区分会は、祭礼や衣服が質素になった等会の実績を誇る中で、「区内に婦人他団体が愛国と女子青年と主なるものは二つですが何と云っても国婦が断然等差」があるとし、他の婦人団体から解散、国婦分会



下町市大災火に於る
國婦分會の活動



奈良市飛鳥會の訓練

への合流申出あったがこれを断ったとしてい
ます（「国防婦人會を設立したる為地方風教に及ぼし
たる影響」6号）。

田路が言うとおりに、国婦と他団体が「工兵と歩
兵」のようなものであるならば、中野村区分会の
ようなあり方が本来の姿といえるでしょうが、実
際には、奈良県でも下田・阪合部・田原本のような
事例が多かったようです。奈良本部理事広瀬貞実
も、町村の事情によっては、国婦と他婦人団体の
役員や会員が重複していることも多く、「動もすれ
ば両者混合合併の姿となり本會としての特徴を失
ひ本會存在の如何を疑はしむるが如き」傾向があ



るとしてい
ます。そのうえで、事業により他団体
と連合するのも可だが、總會や国防精神作興等は
「本會の特有性を發揚すべき諸事業」であり、「他
の婦人會と判然別個に実施し断然其特色を顕はし
本會の旗幟を鮮明ならしむ」必要があるとしてい
ます（「旗幟を愈々鮮明に」26号）。

3. 国婦の終焉

創刊当初奈良本部や傘下分会の作成による記事
がほとんどだった『大和婦人』ですが、号を重ねる
につれ、東京の總本部が作成して一種「配信」した
と思われる記事の割合が増え、34号からは題字の



抹消部分復元

大体は切断せられるものと覚悟は致して居りましたが、さすがに衛生兵がもうこの腕とも永久の別れですと私の眼の前に紫色に変色した腕を突出した時は、あゝ俺も廃兵になったのだなといふ悲しい気持ちをもつて居ることも出来ませんでした、そうしてかの日清日露当時にあつた所謂廃兵を想像せずには居られなかつたのであります。将来如何にして生活戦線を生きて行くべきであるか如何にして世人に組していくべきであるかに心胆を砕いたのであります。

十、日本の算盤みんなで弾け

感ぜし同時に左後に三、三米一吹飛ばされて頭の前まで土で埋められました、その時既に右腕のこの附近の肉や骨は飛び去つて僅かに残つた皮によつて手が支へられてゐました、この腕を運ばれてゐたのであります、大體は切斷されるものゝ覺悟は致して居りましたが、さすがに衛生兵がもうこの腕とも永久の別れですと私の眼の前に紫色に変色した腕を突出した時は、あゝ俺も廃兵になったのだなといふ悲しい気持ちをもつて居ることも出来ませんでした、そうしてかの日清日露当時にあつた所謂廃兵を想像せずには居られなかつたのであります。将来如何にして生活戦線を生きて行くべきであるか如何にして世人に組していくべきであるかに心胆を砕いたのであります。

興亞奉公日

未嘗有ノ時局突破ノ爲メ高度國防國家建設ノ手段トシテ興亞奉公日ヲ決定セラレ眞ニ死物狂ヒノ眞剣ニテレカ奮行スベキモ拘ハラズ近來動々モスレバ消極的又ハ形式的ニ流レテ、アルハ遺憾ナリ我國國防婦人會ハ高度國防國家建設ノ唯一ノ婦人團體トシテ右五月一日興亞奉公日カラ左記要目ヲ一齊ニ之レヲ實踐シリ期カ奉公ノ實ヲ揚ケタカク興亞奉公日實踐要目
國婦會員モ戰場ニアル氣持テ此一日間化粧品ノ使用ヲ止メマセウ

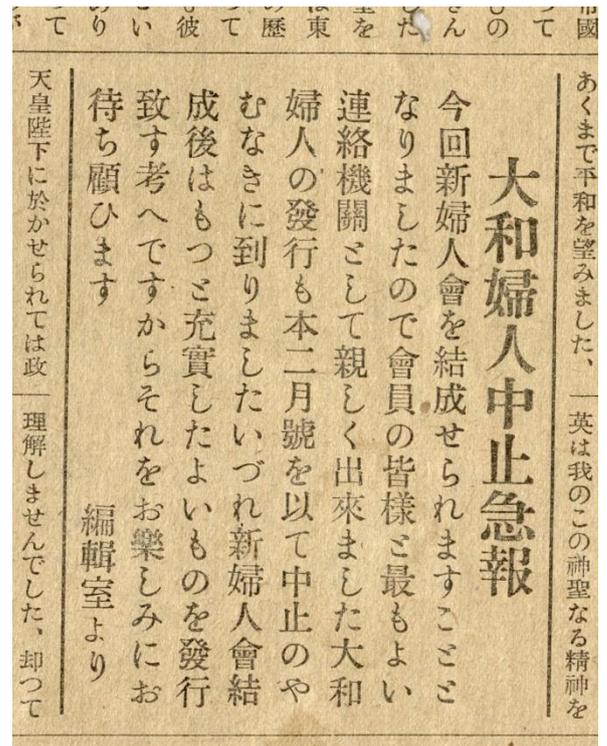
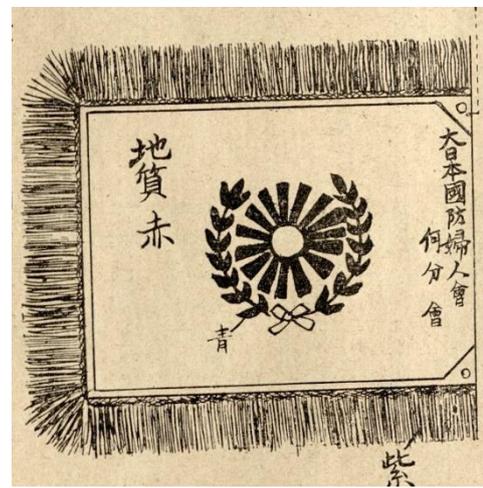


横に「陸軍検閲済」といった文字が入ります。会員数の伸びも設立当初のような勢いはなく、かつて植村が掲げた会員 10 万人を達成したのは、昭和 16 年 8 月にまでずれ込みます (84 号)。

そんな中、79 号では、ちょっとした事故が起っています。この号には、総本部配信と思われる騎兵軍曹田中大造「貴方の右腕には私達が居ります」が掲載されました。趣旨は、戦傷で右手を失った兵士が、国婦会員や各方面の援護と同情に感謝し、決意を新たにするというものですが、当館で所蔵する 2 部の同号を確認すると、文章の途中ほぼ同じ個所が墨塗りされています。これはつまり、

検閲を経、印刷が終わり、頒布の間際になって、急遽再検閲、抹消となったようです。紙面に直接墨を塗っているの、抹消部分の判読は可能です。文章全体の趣旨とは別に、この箇所は刺激が強い上、戦傷を「悲しい」と正直に記したのが、戦意高揚にそぐわないとされたのでしょう。

日中戦争が長期化する中で、国婦を他の婦人団体と統合すべきという議論が高まってきます。しかし、奈良地方本部は、各婦人団体は、協力しあうべきだが「絶対に合同統一すべきものではありません」(「市町村各種婦人団体統一の誤伝に就いて」47 号)と断じ、国の国婦常務理事少将谷実夫も、合



同論に反対する論陣を張り、それが『大和婦人』にも転載されています（「所謂愛婦国婦合同問題に就て」61号、「新体制と国婦会員の心構へ（其二）」75号）。しかし、県—市町村といった通常の行政ルートの外に存在する、国婦総本部や県本部は、総動員体制化、即ち国民を一元的に掌握して戦争に動員していく上では、国内で軍政が敷かれているわけではない以上、邪魔者なりかねない存在でした。『大和婦人』紙上でも、「東條陸相談家庭国防の強化」(82号)で、婦人団体の統合の方針が示され、昭和17年2月に、国婦・愛国婦人会・大日本連合婦人会が合併して大日本婦人会に統合されます。

もちろん、藤井が指摘するように、庶民の動員という点で最も成功を取めた国婦のスタイルが、大日本婦人会にも強く引き継がれたのは言うまでもありませんが、国婦そのものは太平洋戦争開始後間もなくの段階で、姿を消すことになります。

『大和婦人』最終号となった88号では、「いづれ新婦人会結成後はもっと充実した良いものを発行致す考え」としています（「大和婦人中止急報」88号）。しかし、新生大日本婦人会の奈良県組織の機関紙は1号も発見されておらず、発行されずに終わった可能性は高いと言わざるを得ません。

過去の戦争体験文庫資料展示一覧表		
回数	期間	展示テーマ
第1回	平成17年11月1日～1月31日	戦争と少年たち
第2回	平成18年2月1日～3月30日	戦時下の国民生活 徴兵される青年たち
第3回	平成18年4月1日～5月30日	戦時下の国民生活 銃後の生活
第4回	平成18年6月1日～7月30日	戦時下の国民生活 占領下の生活
第5回	平成18年8月1日～9月30日	戦争と教育1 ある教育実習生の日誌を中心に
第6回	平成18年10月1日～11月29日	戦争と教育2 学童疎開
第7回	平成18年12月1日～19年1月30日	軍隊と地域1 戦地・占領地での軍隊 ビラと軍票
第8回	平成19年2月1日～3月29日	軍隊と地域2 村と軍隊 村役場/在郷軍人会
第9回	平成19年3月31日～6月28日	軍隊と地域3 村と軍隊2 勤労・増産・金属回収
第10回	平成19年6月30日～9月27日	軍隊と地域4 奈良の戦争遺跡 奈良聯隊 奈良海軍航空隊
第11回	平成19年9月29日～12月27日	戦争と手紙1 出征
第12回	平成20年1月5日～3月27日	戦争と手紙2 戦地からの手紙
第13回	平成20年3月28日～6月26日	戦争と手紙3 戦地への手紙
第14回	平成20年6月28日～9月28日	戦争と手紙4 帰還
第15回	平成20年10月1日～12月27日	子どもたちが見た満州1 満州修学旅行
第16回	平成21年1月6日～3月29日	子どもたちが見た満州2 満州建設勤労奉仕隊・満蒙開拓青少年義勇軍
第17回	平成21年4月1日～6月28日	戦争と食べもの1 米の配給と供出
第18回	平成21年7月1日～9月29日	戦争と食べもの2 野菜
第19回	平成21年10月1日～12月27日	戦争と食べもの3 調味料
第20回	平成22年1月5日～3月30日	戦争と食べもの4 代用食
第21回	平成22年4月1日～6月29日	就職先としての軍隊 海軍志願兵
第22回	平成22年7月1日～9月29日	進学先としての軍隊 陸軍士官学校、海軍兵学校
第23回	平成22年10月8日～12月26日	工場 国営兵器工場
第24回	平成23年1月5日～4月17日	貯蓄報国
第25回	平成23年4月19日～6月29日	大和の隣組 戦争を支えた地域組織
第26回	平成23年7月1日～9月29日	大和錦 在郷軍人会奈良支部の活動
第27回	平成23年10月1日～12月27日	産業組合から農協へ 戦時・戦後の協同組合の再編
第28回	平成24年1月4日～3月31日	赤十字 その成り立ちと展開
第29回	平成24年4月1日～6月28日	8.15で終わらなかった戦争 日赤奈良班看護婦の手記から①
第30回	平成24年6月30日～9月27日	灼熱の陽の光の下で 日赤奈良班看護婦の手記から②
第31回	平成24年9月29日～12月27日	病院船の上で 日赤奈良班看護婦の手記から③
第32回	平成25年1月5日～3月28日	原爆の惨禍を目のあたりにして 日赤奈良班看護婦の手記から④
第33回	平成25年3月30日～6月27日	かるたで読む「戦陣訓」
第34回	平成25年6月29日～9月29日	小学生国史受験かるたの世界
第35回	平成25年10月3日～12月27日	大淀町学校支援地域本部 戦争カルタの世界
第36回	平成26年1月5日～3月27日	愛国百人一首を読む
第37回	平成26年3月29日～6月26日	日本統治下サイパンの日常から戦争へ 須藤氏手記1
第38回	平成26年6月28日～9月28日	爆撃中の逃避行 須藤氏手記2
第39回	平成26年10月1日～12月27日	壕からかいまみた日本兵と米兵たち 須藤氏手記3
第40回	平成27年1月6日～3月29日	極限の日々から 須藤氏手記4
第41回	平成27年4月1日～9月27日	あの日から70年 追想の8.15
第42回	平成27年10月1日～28年3月30日	進駐軍と奈良 <i>Occupied Nara</i>
第43回	平成27年4月1日～7月19日	昭和15(1940)年、紀元2600年祭 — あなたは知っていますか? —
第44回	平成27年7月20日～11月30日	「奈良連隊」がいた光景
第45回	平成28年12月1日～29年3月30日	陸軍少年兵
第46回	平成29年4月1日～7月27日	戦勝記念図書館の記憶/記録
第47回	平成29年7月29日～12月27日	鉄道連隊
第48回	平成30年1月5日～3月29日	民博所蔵戦時債権の世界
第49回	平成30年3月31日～8月30日	陸軍特別大演習 於奈良・大阪
第50回	平成30年9月1日～12月27日	日清・日露戦争と奈良(「明治150年大和から奈良へ」の一部として)
第51回	平成31年1月5日～4月30日	昭和8年12月23日「祝皇太子殿下御生誕」の時代
第52回	令和元年5月1日～8月29日	墨塗り教科書
第53回	令和元年9月1日～2年2月27日	聯隊区司令部
第54回	令和2年2月29日～6月28日	日中戦争
第55回	令和2年10月1日～3年1月28日	昭和13年の第3機関銃中隊1 ～部隊陣中日誌から
第56回	令和3年1月30日～4月29日	昭和13年の第3機関銃中隊2 ～部隊陣中日誌から